

布いろ 様
愛用ミシン:A8000

ばあちゃんとミシン

ばあちゃんは 大正うまれ。
ばあちゃんは もうこの世にはいない。

ばあちゃんを思い出す時、
黒い足踏みミシンが頭に浮かぶ。


あれはいつだったか。私が小学生の頃、熱をだし
家の 2 階で ひとり寝ていた。
時折、ばあちゃんが 2 階にきては看病をしてくれた。

熱が下がり、2 つ隣の部屋からカタカタ音がした。いつもは 静まり返った部屋だ。
そこには ばあちゃんのミシンがあったのだ。様子を見に行くと 薄暗く ばあちゃんの後ろ姿しか
みえない。

カタカタカ…タカタカタカタ……。チョキ、チョキン、カタカタ…不思議なリズムが続く。

次の日、聞いた。
「ばあちゃん、何 つくつとんの？」いつも決まって「内緒」という。

しばらくして 隣で寝ていた兄の枕カバーが 新しくなっていた。これを作っていたのか。
私が見た ばあちゃんがミシンを踏む姿は これが最初で最後だった。



私はそれから建築士になり、住宅設計図、室内パースを何千枚と書いた。今は 小学生 3 人の子育て真っ只中である。

ジャンメのミシンで、子供の布製品を作り、自分の服も作る。オーダーもお受けしている。服作りは、小さな建築なのだと いつも思う。

皆に「服飾の勉強をしたの?」「昔からミシンが好きだったの?」と聞かれるが、ハッキリとは答えられない。ただ好きだから。

先日、実家にある ばあちゃんのミシンを開けてみることにした。

開けた瞬間。

あまりにも 美しく びっくりした。

ピアノのような漆黒色。銀の装飾。手元灯のマッチのような温かみのある光。無垢板の木目。どれをとっても私には宝物にみえた。綺麗に磨きあげ、また静かに格納した。

開けたら、日光に当たり銀が曇る気がしたし、当時のばあちゃんの記憶も 儚く飛んでゆくようで。

今、思えば、ミシンは女性のみが使える高機能機械だった。男性は触れない神聖な領域。我が家にとって、女性の産業革命の象徴でもあった。だから 私は 憧れ、その記憶がずっと頭から離れないのである。

今の私の生活には 文房具のようにミシンがある。そう 鉛筆のようにミシンを使い、作品を作り出す。

これが 私とばあちゃんとミシンの物語である。ミシンの形状は様変わりしたが、ミシンが作り出す思い出は不変なのである。

